

刊行にあたって

歴史を知ること、古代史を知ることの「面白さ」を伝えたい。本シリーズは、私たち編集委員のそうした思いからスタートしました。

幸い日本の古代史に関心を持つ人は多く、各地の遺跡や博物館は訪問者で賑わい、古代史をテーマとする書籍や情報も巷にあふれています。いっぽうで最新の研究の進展はめざましく、より精緻なものとなっているために、その成果を専門家以外の方と共有することが難しくなっていることも事実です。

しかし、新しくわかってきた歴史の実像を知ることの興奮や喜びは、他の何にも替えがたいものです。私たち研究者が日々味わっているこの「面白さ」を、「やさしく、深く、面白い」歴史叙述によってさまざまに「ひらく」ことを通じて、読者の皆さんにお伝えしたいと考えました。

本シリーズは「前方後円墳」「古代の都」「古代寺院」「渡来系移民」「文字とことば」「国風文化」と、数ある古代史の論点のなかでも特に「モノから語る」ことに適したテーマ問題群ごとに各冊を編成しました。これらは、考古学・文学・日本語学・美術史学・建築史学など、隣接分野との緊密な連携なしに語れない問題群です。各分野で活躍中の執筆陣の参加を得て、多様な

方向からできるかぎり具体的に、当時の社会や民衆のありように迫ることをめざしました。同時に、海外の信頼できる研究者に執筆を依頼して、国際的な観点からの新しい視角を紹介していきます。

さらにもう一つの特徴として、単なる研究成果の羅列にならないように、執筆者相互が原稿を読みあい、その問題群の面白さ、現段階での争点や未解決の論点、そして今後の研究の方向性などを話しあう「座談会」を各冊ごとに収録します。

全編をつうじて、従来の「古代史」の枠内に閉じこもるのではなく、そのテーマが日本史全体のなかでどういう意味を持つのか、つねに意識するように心がけました。「学際」「国際」「通史」という三方向の視点を併せ持つことで、これまでにない古代史のシリーズを創り上げ、未来に向けて「古代史をひらく」ことをめざします。

二〇一九年四月

編集委員

吉村武彦・吉川真司・川尻秋生

目次

刊行にあたって

〈古代寺院〉への招待

吉川真司 1

古代寺院の生誕

吉川真司 23

遺跡からみた古代寺院の機能

菱田哲郎 77

古代寺院の仏像

藤岡穰 135

寺院建築と古代社会

海野聡 195

古代寺院のネットワークと人々

ブライアン・ロウ
(翻訳 山口えり) 263

座談会 〈寺院史〉研究の可能性

(吉川真司・菱田哲郎・藤岡穰・海野聡・吉村武彦) 301

日本古代寺院史略年表

* 引用文・引用挿図の出典や本文記述の典拠などを示す際には、「吉川、二〇一九」のように略記し、その文献名・出版社・出版年などは各章末の文献一覧に示した。

* 史料の引用にあたっては、原則として旧字体を新字体に、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた『万葉集』からの引用など、一部例外的に旧仮名遣いのままとした箇所がある。

〈古代寺院〉への招待

吉川真司

古代寺院を訪れて

古代寺院を訪れるのは、ほんとうに特別な経験だと思う。法隆寺ほつりょうじに行ったときのことを思い出してみよう。松並木の向こうに五重塔が姿を現わすと、思わずはっとしてしまう。金堂こんどうに入り、落ち着いた光と香りに包まれて、釈迦しゃか三尊像さんぞんざうに対面する。その相貌は取っつきにくいけれど、なぜか目が離せない。やがて、石畳道のかなたに夢殿ゆめどのの屋根が見えてきて、美しいデザインに心躍る思いをする。——このような時間をもつのは、たいへん貴重なことである。はるかな古代を感じとり、魅了されてしまう人もいるだろう。

ただ、美術史や建築史を学んで、仏像や建物のスタイルがどのように変化したかを知っておけば、見学はずっと面白くなる。また、法隆寺や斑鳩いかるが地域の歴史を勉強すれば、ひとつひとつの文化財の意味がよくわかる。詳しい地図もほしい(図1)。



図1 法隆寺の地図([奈良六大寺大観刊行会編, 1972]の「解説」所収地図に, [仁藤, 1991]所収の図を参考に加筆)

東大門のところで石畳道の方向が変わるのは、法隆寺の成立史に関わる問題なのだが^①、地図があれば寺院全体を眺めわたり、かつての伽藍の姿を考える手がかりにもなる。そして地図を手に、境内をくまなく歩く。東室・西室、食堂、網封藏のように、有名ではないが、古代寺院の生活に欠かせない建物が目に入ってくる。知識と探究心をもって訪れば、今も生きている古代寺院は、たくさんあることを教えてくれるのである。

法隆寺を出て、西に三キロあまり行くと、近鉄生駒線の

(1) 古代の法隆寺は、三段階の歴史を経て形づくられた。第一段階が聖徳太子による若草伽藍創建(七世紀初期)、第二段階が西院伽藍の再建(七世紀後半―八世紀前半)、第三段階が東院伽藍の建立(八世紀中葉)である。このうち第一段階の建物と、第二・第三段階の建物は、方位が異なっている。前者は北で二〇度西に振れる、後者は八度西に伸びる道は、第一段階の古い方位をとどめており、飛鳥時代以来のものと考えられる。おそらく東大門を境として、東へ向かう道は第一段階、西へ向かう道は第二・第三段階の建設方位によっており、そのため一直線にならないのであろう。



図2 平隆寺(著者撮影)

勢野北口駅につく。すぐ近くに平隆寺という寺院がある。法隆寺と一字違いだが、こちらは小さく清々しい近世寺院で、受ける印象は全く異なっている。しかし平隆寺は、実は飛鳥時代の寺院遺跡の上に建っていて、古い寺号を受けているのである。平隆寺の「平」は平群氏の「平」。この地に勢力を張った古代豪族の氏寺の遺跡が、今も地下に眠っている(図2)。

平隆寺を訪れる人はさほど多くない。古代の建物や仏像はすべて失われてしまった。しかし、本堂の床下をのぞけば古い礎石が並んでいるし、まわりの田畑や道ばたには布目のついた飛鳥時代の瓦が落ちてい

る。なにより、すばらしい立地は古代から変わっていない。信貴山から伸びてきた尾根の先端に、古代平隆寺の伽藍があった。大規模な造成工事のさまは、今でも地形からおおよそ見当がつく。在りし日の南大門からおおよそ眺めれば、奈良盆地の水を集めた大和川の流れば、眼下に白く光っていたことだろう。

平隆寺は、これまでに何度か発掘調査された。参道の脇で塔跡が見つかり、

(2) 古代の有力豪族。蘇我氏・巨勢氏・紀氏などと同じく、建内宿禰の後裔氏族とされ、五世紀ころに最も繁栄した。その本拠地は、平隆寺あたりからその北方の平群谷(奈良県平群町)にかけてと考えられる。

(3) 豪族が建てた寺院のこと。官寺に対する私寺に近い意味だが、研究上、寺院を建てた氏族が問題とされることが多いため、氏寺の語がよく使われる。しかし法隆寺のように、王族が創建した古代寺院を氏寺と呼ぶことは難しい。

(4) 布目瓦については、本書、菱田哲郎「遺跡からみた古代寺院の機能」七九頁、注3参照。

金堂は今の本堂の東側にあつたらしい。塔・金堂・講堂が南北一直線にならぶ、天王寺式伽藍配置と考えられている。出土した軒瓦は、法隆寺など斑鳩地域の寺院と同じ文様をもち、飛鳥・白鳳・奈良の各時代のもが見られる。平隆寺がいかなる人々と関係をもち、いつ・どのように建てられたかは、こうした考古資料から知ることができる。また、平安時代以降の文献史料もいくつかあり、中世の聖徳太子伝にもいろいろ伝承を収める〔奈良県立橿原考古学研究所、一九八四〕。

斑鳩の法隆寺にも、もちろん豊かな考古資料と文献史料がある。法灯を今に伝える法隆寺も、遺跡となつてしまつた平隆寺も、かつては古代寺院として生き生きと活動していた。その痕跡がさまざまなかたちで、長い時間をこえて残っているのである。建築にも美術にも、地形にも道路にも、古代が息づいている。古代寺院やその遺跡を訪れて、よく歩き、よく見ることは、古代史に近づくための最良の方法だと思ふ。

飛鳥寺院

法隆寺(斑鳩寺)は七世紀の初期に創建された。私たちが見ている塔や金堂は、実はその時のものではない。やや東南にあつた「若草伽藍」こそが、聖徳太子が斑鳩宮と東西にならべて建立した、最初の法隆寺であつた。それが天智九年(六七

(5) 承平七年(九三七)の「信貴山寺資財帳」〔平安遺文〕四九〇四号)や延久二年(一〇七〇)の「興福寺大和国諸莊田畠坪付帳」(同四六四〇号)によれば、平隆寺の寺田は平群郡九条一四里にあつた。現平隆寺の西側にあたり、いわゆる「寺辺所領」と見られる。したがって、古代の平隆寺は、その寺号で今の場所にあつたと考えてよい。鎌倉時代以降は古文書に現われず、聖徳太子関係の説話が伝わるばかりになる。嘉吉元年(一四四一)の年紀をもつ『興福寺官務牒疏』は「平群寺。平群郡勢益原にあり。僧宇三十二坊、交衆二十一口、承仕十六人。推古天皇九辛酉年、平群神手將軍の本願なり。本尊は弥勒大士」と記す。しかし、

○)に焼け落ちたあと、場所を少し移して再建されたのが、現在の「西院伽藍」なのである。^⑥

法隆寺と同じころ創建された寺院を「飛鳥寺院」というが、その歴史は考古学によって解明されてきた「菱田、一九八六／大脇、一九九四／森、一九九八」。軒瓦の文様や製作技法から見れば、倭国(日本)最初の本格的寺院は飛鳥寺である。^⑦発掘調査によつて、飛鳥寺は塔を中心とし、その北・東・西に三つの金堂を置く、特異な伽藍配置であったことがわかった。文献史料によれば、飛鳥の真神原にこの寺を建てたのは、大臣蘇我馬子である。百済王が倭国に仏教を伝えたのは、五三八年とも五五二年ともされるが、蘇我氏はずっと仏教護持の姿勢をとつてきた。そして朝廷の排仏論をおさえこみ、崇峻元年(五八八)に飛鳥寺の建設を始めたのである。八年後には主な堂塔ができあがり、ついで仏像の制作が進められたが、これらの事業を支えたのは百済の技術者たちだった。飛鳥寺は蘇我氏の庇護のもと、倭国の新しい宗教・技術のセンターとなつていく。

やがて、王族・豪族にも寺院を建てたいと考える人々が現われ、それとともに飛鳥寺の新技术が広まつた。たとえば飛鳥寺の瓦工人は、すぐ近くの豊浦寺の建設にも参加し、ついで斑鳩の法隆寺、さらに摂津の四天王寺に移つたことがわかつてい^⑧る。豊浦寺はおそらく推古天皇、法隆寺・四天王寺は聖徳太子に関わる寺院で、二

この史料は近世に捏造された偽文書なので「馬部、二〇一九」、信用してはいけない。

(6) 西院伽藍の東方に、夢殿を中心とする東院伽藍(上宮王院)がある。これは天平七年(七三五)から同一一年にかけて、光明皇后が創建した寺院である。この場所にはかつて聖徳太子の斑鳩宮があった。光明皇后は、律師行信の働きかけによつて太子信仰を深め、その跡地に太子をまつる寺院を建立したのである。こうした文献的知見は、発掘調査で見つかった遺構や軒瓦などの考古学的研究によつても裏付けられてい^⑨る。

(7) なお、蘇我馬子は敏達一三年(五八四)、石

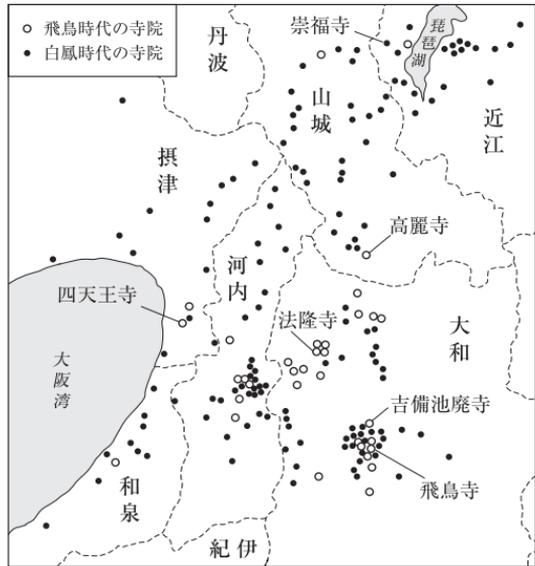


図3 近畿地方の寺院分布図([上田, 1979]巻末地図を参考に作図)

人とともに蘇我氏の血をひく王族であった。これに続き、斑鳩周辺では中宮寺・平隆寺・法起寺、飛鳥では坂田寺・奥山廃寺、河内では船橋廃寺・新堂廃寺、山背では北野廃寺が建てられる。飛鳥寺院は、蘇我氏・蘇我系王族の権勢のもと、ほとんどが畿内地方に生まれ、

川宅に仏殿を造り、翌年には大野丘の北に塔を建てたという(『日本書紀』敏達一三年是歳条・一四年二月壬寅条)。

(8) 公伝を五三八年とするのは『元興寺縁起』、五五二年とするのは『日本書紀』であるが、いずれとも決めがたい。

(9) 初期の瓦工人がいくつかの集団からなっていたことは、本書、菱田「遺跡からみた古代寺院の機能」一一三頁、本文および注30参照。

推古三二年(六二四)には僧寺・尼寺あわせて四六寺にのぼったという(図3)。こうした流れを変えたのが、舒明天皇による百濟大寺の創建であった。舒明一一年(六三九)、彼は百濟川のほとりで王宮と寺院の建設を始め、百濟大寺に九重塔を建てた。聖徳太子による斑鳩宮・斑鳩寺の造営をまねたものだが、天皇の勅願寺が創建されたのはこれが初めてである。蘇我氏の血を引かない舒明天皇は、このこと

(10) 『日本書紀』推古三二年九月丙子条。「寺および僧尼を校えて、つぶさにその寺の造るところの縁、また僧尼の入道の縁、および度(僧尼として認可)せる年月日を録



図4 吉備池廃寺(写真提供 = 奈良文化財研究所)

よって権威を高めようとしたのだろうか。百済大寺の遺跡は近年、奈良県桜井市の吉備池廃寺(図4)であることが確定した^{〔11〕}。奈良文化財研究所編、二〇〇三。飛鳥寺の三倍の面積の金堂基壇と、高さ八〇メートルもある塔の基壇が東西にならぶ、壮大な寺院遺跡である。軒瓦はかつて「山田寺式」と呼ばれていたもので、勅願寺の権威ゆえか、飛鳥寺の瓦に代わって全国に広まっていった。舒明の死後、百済大寺は

妻の皇極天皇に受けつがれ、その後も舒明・皇極の子孫である歴代天皇の崇敬をうけた。何度も移転し、寺号を高市大寺・大官大寺・大安寺と改めながら、ずっと官大寺のトップにあり続けたのである。

白鳳寺院

「脱・蘇我氏」を決定づけたのは、皇極四年(六四五)の宮廷クーデタとそれに続く大化改新である。蘇我本宗家を滅ぼした改新政権は、みずからが仏教興隆をはかり、王族・豪族たちの寺院建設を助けると宣言した。おそらくこの政策をうけて、

するなり。この時にあたり、寺四十六所、僧八百十六人・尼五百六十九人あわせて一千三百八十五人あり^{〔11〕}。

〔11〕山田寺で見つかるのでこう呼ばれていたが、吉備池廃寺の発見により、先にこちらで製作・使用された文様であることがわかった。主な軒瓦の文様は二二―一三頁の図を参照。

〔12〕朝廷が建設・運営した大寺院のこと。もともと、天皇が発願した、天皇家の法会を行なうための寺院であるから、比喩的に言えば、天皇家の「氏寺」にはかならない。その意味では、「勅願寺」も「官大寺」も、内実はほとんど変わらない。

畿内地域だけでなく、列島各地で続々と寺院が建てられていく。

改新から平城遷都ころまでに創建された寺院をふつう「白鳳寺院」と呼び、その総数は飛鳥寺院のおよそ一〇倍にもなる。持統六年(六九二)の倭国には五四五の寺があったとされ、飛鳥・白鳳寺院の遺跡数とおおむね一致している。改新政権は、全国にコホリ(評、のちの郡)という地方行政組織を置いたが、その数も六〇〇ほどで、平均すれば「一郡に一寺」である。もつとも、コホリが全国にくまなく置かれたのに対し、白鳳寺院は分布にかたよりがあり、畿外では近江・播磨・備中・讃岐・伊予などに多く、日本海側はなぜか少ない「菱田、二〇〇二」。そうした偏差をもちながら、律令体制の形成とともに、あたかも双生児のように、寺院とコホリは列島各地に姿を現わしていった。

瓦の文様を見てみると、各地の白鳳寺院には百済大寺の「山田寺式」軒瓦、ついで「川原寺式」軒瓦を用いるものが目立つ。川原寺は六六〇年代前半に、天智天皇が飛鳥に創建した倭国第二の勅願寺である。天智・天武朝に川原寺式軒瓦が広がったのは、直接的にせよ、間接的にせよ、王権による造寺支援があったためであろう。また、法隆寺は天智九年(六七〇)の全焼後、ほどなくして再建され、瓦の文様も新調された。この「法隆寺式」軒瓦も各地で出土しているが、その多くは法隆寺と結びついた地域・寺院の遺跡である「鬼頭、一九七七」。貴族・豪族や僧侶など、さま

(13) 『扶桑略記』持統六年九月条。「勅ありて、天下の諸寺を許えしむ。すべて五百四十五寺。寺別に灯分稻(灯明の財源となる稻)一千束を施入す。大官大寺には、資財・奴婢を種々施入し、旧き洪鐘(梵鐘)を改め、銅数千斤を加え調えて、新たにこれを鑄る」。

(14) 本書、二二―二三頁「古代寺院の軒瓦」図および海野聡「寺院建築と古代社会」二二二頁、注51参照。

さまざまな人的關係をたどって、中央の技術が全国化していったのであろう。

天武二年(六七三)、天武天皇は飛鳥浄御原宮^{あすかきよらのみや}で即位すると、その北方に百濟大寺を移して高市大寺(のち大官大寺)とし「小澤、二〇一九」、川原寺や飛鳥寺の整備にも力を入れた。飛鳥の都には豪族たちも寺院を営んでおり、天武朝には京内に二四以上の寺があった。¹⁵「仏都」の始まりである。やがて天武九年、大化の寺院支援策が改められ、天皇直營の「国大寺」、三〇年間の援助を続ける「有封寺」、そのほかの一般寺院という三つのランクが定められた。¹⁶天武九年の三〇年後といえ、平城遷都が行なわれた和銅三年(七一〇)であるが、そのころには白鳳寺院の創建ラッシュも終焉を迎えたようである。¹⁷

天武天皇は、天武五年に新しい都の造営を始め、いったん中断したのち、同一一年に再開した。彼の死後、持統天皇が事業を受けつぎ、持統八年(六九四)に遷都がなされた。これが十条十坊の正方形都城、藤原京である「小澤、二〇〇三」。

藤原京の計画・造営とともに、多くの寺院がそのなかに位置づけられた。天武九年に天武天皇が発願した葉師寺、文武朝に移されてきた大官大寺などは、条坊にきっちり合わせて建てられている。藤原京の北部(横大路以北)は、飛鳥の都と重ならないため寺院が見あたらないが、あと何十年か都が存続すれば、ここにも新しい寺院が建ちならんだかもしれない。

(15) 『日本書紀』天武九年五月乙亥条。「京内二十四寺」に織維製品が勅施入されたのだが、倭京(飛鳥の都)にあった全寺院を対象にしたとは限らない。なお、天智朝には川原寺のほか、近江遷都にともない、大津宮北方に南滋賀廢寺と崇福寺が創建された。

(16) 『日本書紀』天武九年四月是月条。

(17) 寺院の建設には長い時間がかかるので、その後も継続されたであろうが、新たに創建されることは減ったのではなからうか。なお、靈龜二年(七一六)の寺院併合令も、このような歴史的文脈から理解できそうである。

しかし、和銅三年の平城遷都により、藤原京は廃止される。そしてこの時、古代史上でただ一度、数多くの寺院の移転が行なわれたのである。一〇年ほどの間に大官大寺(平城京では大安寺)、薬師寺、飛鳥寺(元興寺)、厩坂寺(興福寺)をはじめとする諸寺が、寺号と人員・資財を受けつぎながら、平城京で新造された。川原寺のように動かなかつた寺院もあるが、移転した寺院でも、旧伽藍はもとの場所にそのまま残されるのがふつうであつた。

国分寺と東大寺

奈良時代になると、全国の豪族たちの寺院建立熱は下がり、氏寺の創建はかなり少なくなつた。しかし、天平年間(七二九―七四九年)に入るところから、聖武天皇・光明皇后が仏教に傾倒し、古代寺院史は新たな段階を迎えることになる。

神亀五年(七二八)、聖武天皇の皇子・某王¹⁹が夭折すると、その冥福を祈つて山房(金鍾寺)が創建された。山房は大規模な山林寺院で、その遺址が東大寺丸山西遺跡と考えられる[吉川、二〇〇〇]。ここに積極的な官寺造営の時代が幕をあけた。やがて天平七年(七三五)・九年に疫病が大流行し、列島社会が深刻な危機に陥ると、聖武は全国に国分寺・国分尼寺を建て、人々の精神的救済をはかった。さらに聖武は、盧舎那大仏を知識(仏教的作善を行なう信仰グループ。智識とも)の力によつて建立

(18) 藤原氏の氏寺。藤原鎌足が山城国宇治郡に建てた山階寺を起源とし、大和高市郡に移されて厩坂寺となり、さらに平城京で興福寺に改められた。こうした歴史を裏付けるように、興福寺領の山城国宇治荘・大和国雲飛荘は、それぞれ山階寺・厩坂寺の故地を受け継いでいるらしい[吉川、二〇〇九]。平隆寺でもそうだったが、古代の荘園史・土地制度史をきちんと理解していれば、寺院史の研究にも役立つことが多い。

(19) 「某王」とする説もあるが、古代王族の名は氏族名や地名によるのがふつうで、どちらでもない「モトイ」は不自然である。正式に命名されないまま夭折したため、